

日本の合唱教育における西洋音楽の影響

CHORAL EDUCATION IN JAPAN UNDER THE IMPACT OF WESTERN MUSIC

奥 忍 (音楽教室)

Shinobu OKU

本稿は日本の合唱教育の現状を、西洋音楽の影響という視点からグローバルにとらえようとするものである。日本民謡「斎太郎節」に焦点をあて、伝統的な日本民謡の様式と西洋様式による合唱のかけ声の音響的相異を明らかにするとともに、それらがいかに知覚・認知されるかという2側面から合唱における西洋音楽の影響を論じた。

キーワード：合唱教育、日本民謡、斎太郎節、音響分析、西洋音楽の影響

1. はじめに

「合唱」ということばは、西洋では、ユニゾンかあるいはもっと一般的には声部にわかれて一緒に歌うことを意味している(J. Smith 1980 341)。しかし日本では人々が一緒に歌うときでも声部にわかれて歌うことはほとんどなく、独特のユニゾンが行われていたのである。典型的な例は1844年に来日したエミール・ギメの多数の僧侶による読経の描写に見られる。

彼(導師)はあたかも声が喉のなかで回転するように長く引っ張って、上昇する声にいくらか抑揚をつけ、単調な語りを始める。それから坊さんたちは、声を揃えて繰り返す。それぞれ自分の調子で、である。しかし、多くの人間の声で作られるこの種の半音階の律動的な唸り声は、自然の偉大なハーモニーを連想させる。

(Emile Guimet 1880 165)

各自固有の音高によるユニゾン歌唱は、読経ばかりでなく複数の人が同時に歌うときにしばしば出現する、いわば日本的同時歌唱(合唱)の一つの特徴である。この伝統は現在でもまだ見ることができる。

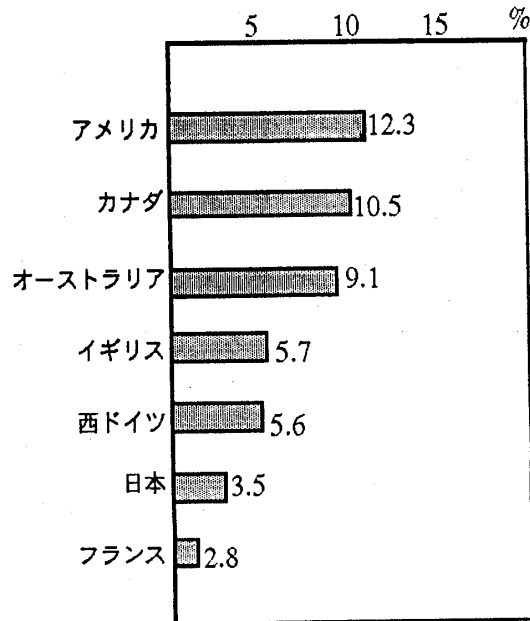
伝統的な合唱におけるもう一つの方法はリーダーと他の歌手たちとの間に交わされる交唱である。この方法は集団労働のための民謡に見いだされる。ふつうリーダーが1節を歌った後他の歌手が短いかけ声をかけるが、この場合のかけ声も歌手各々の固有の音高で唱われる。

一方、西洋様式の合唱は現在の日本ではカラオケとともに最もポピュラーな趣味の一つである。地方公共団体や放送局、ヴォランティアに支えられた少年少女合唱団、高校や大学の合唱クラブ、ママさんコーラスや職場コーラスなど数多くの合唱団が活動している。

図1は趣味として合唱・歌唱活動に参加している人々の割合を示したものである。日曜日に教会で讃美歌を歌う習慣のある西洋キリスト教国に比べれば、日本の割合は少ないが、

それでも多くの人々が合唱活動に参加している。現代日本の作曲家にとって上演可能性が最も高いジャンルは合唱であるといえよう。

図1 趣味として合唱・歌唱活動に参加している人々の割合



余暇開発センター“余暇利用の7ヶ国比較 '89”

学校音楽教育はこのような合唱活動の発展に大きく寄与してきた。カラオケ愛好家と合唱参加者を比較した私の調査によれば（奥 忍 1996b），合唱参加者の方が学校時代の音楽教育を高く評価している。日本における学校音楽教育が実際に始まったのは1900年代のはじめである。その時以来学校音楽教育では合唱をすることが最も重要な目標の一つとされてきた。共通歌唱教材「さくら」がこの考え方を象徴的に表している。「さくら」は小学校4年では斉唱の必修教材として指定され，中学校1年では合唱の必修教材となって再度学習される。

ところで，日本の音楽観は西洋のそれとは全く異なっている。例えば，我々は複数の音がピッタリと同時に響くことをよしとせず，微妙にずれるところに美を見いだす。固定的な音高ではなく，旋律進行に従って微妙に変化していく音高に音楽的意味を見いだす。我々はあいまいで，濁った響きを好む。このようにして日本の伝統的音楽性は基本的に西洋の合唱の概念とは全く対極にあるといえることができるだろう。

従って，美しく合唱するためには我々は伝統的な日本の音楽観や感受性を排除して，西洋のそれを受け入れなければならない。日本の子どもたちは，学校外では彼らの感情をより自然に，より自由に表現できる地声で歌い，音楽教室では頭声的発声で歌うことが求められている。音楽教師は子どもたちがいかにして同時に歌い始め，いかに声質をそろえ，表現をまとめるかに集中して指導を行っている。

いいかえれば，合唱を目指す学校音楽教育は日本的音楽性を西洋化することを目的としているといえよう。このねらいは生活の西洋化とあいまってある程度成功しているように見える。ポピュラーやクラシックの西洋音楽，日本の作曲家による西洋音楽手法の音楽が

日本の至るところで響いている。今日では多くの日本人は日本音楽よりも西洋音楽の方を好んでいる。若い世代はしばしば日本音楽のことを「暗い」「ださい」「古い」と評し、日本音楽に興味を示さないし、意味も見いださない(奥 忍 1990 135)。

2. 日本民謡の合唱

伝統的民謡は西洋音楽手法によって、すなわち和声的に、または対位的に編曲されて歌われる。ところでかけ声は、伝統的な民謡歌唱においては各自固有の音高による地声の斉唱によって独特の響きを作り出している。しかし、合唱ではかけ声は西洋の記譜によって、調和して美しく響くようにしばしば歌われる。従って、たとえどのリズム・パターンも旋律線も変えられていなくても響きそのものが合唱では西洋化されてしまう。

楽譜1は本州東北部の有名な漁師歌である。かけ声をかけながら漁師たちは櫓を漕ぐ。かけ声はオスティナートのように歌全体を通して唱われる。図2は日本の伝統的な表現と西洋化された合唱表現によるかけ声のリズムとダイナミクスを比較したものである。

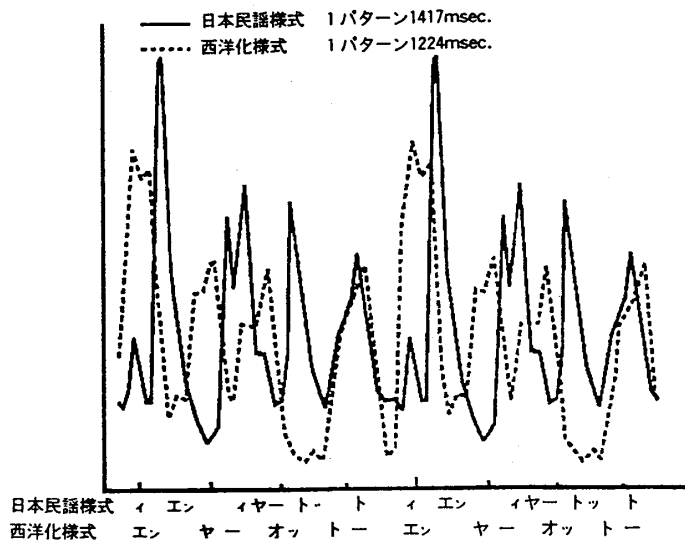
楽譜1 斎太郎節

町田嘉章採譜

どちらの様式においてもビートは不均等である。西洋化様式では第1拍の頭が最も強く、その結果拍が明瞭に感じられる。一方、日本民謡様式の方では第1拍の頭はむしろ弱く、一瞬後強くなる。その結果第1拍は不明瞭になるが、これが日本独特の時間的持続「間」をもたらしているのではないかと考えられる。

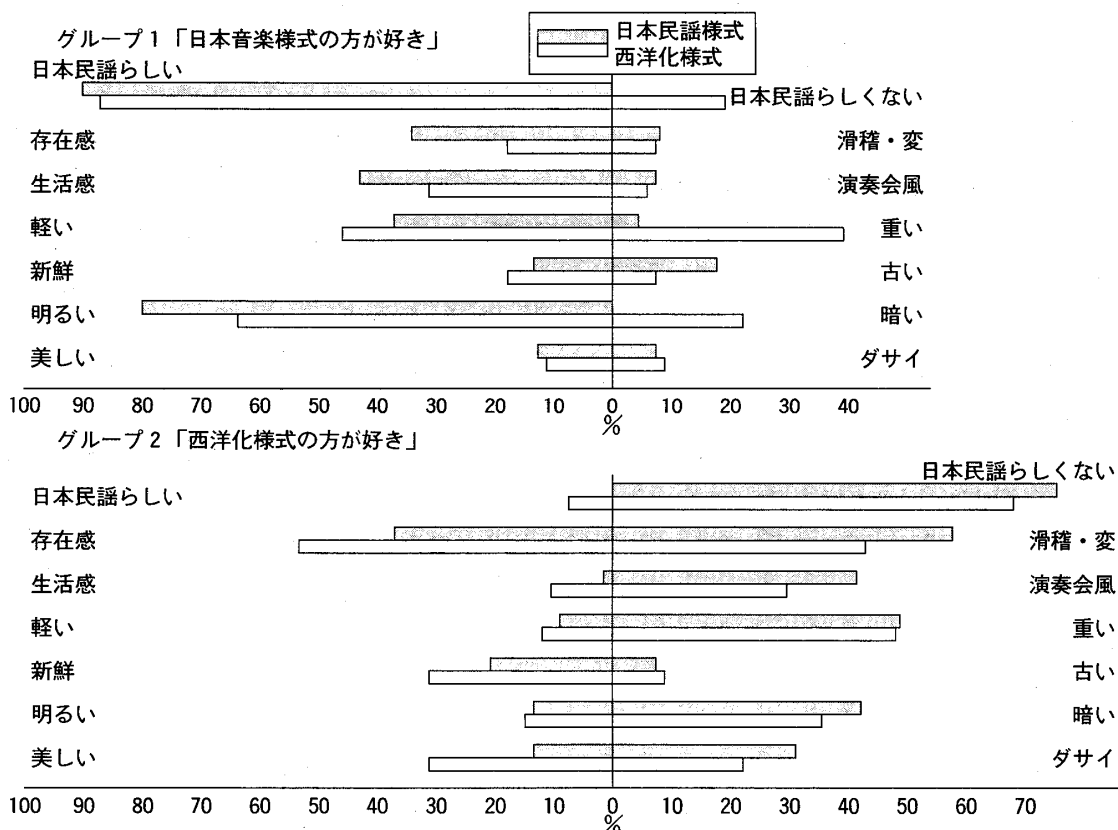
図2 かけ声のリズムとダイナミクスの分析(♪♪♪♪)

「間」は日本音楽における時間原理である。この語はアクセントのない時間の間隔を意味している(平野健次 1983 2394 1)。規則的な拍は時間的距離を分割するに過ぎない。それゆえ拍は、ストレスを伴う西洋音楽の拍のように明白でない。「間」に対する感覚が日本音楽の感受に重要な役割を果たすと考えられる。



これら2種の表現についてどちらが好ましいか高校生に尋ねたところ(奥 忍 1996a 7-18)142人の被験者の中で45.1%が日本伝統様式の方が好ましいと答え、48.6%の者が西洋化様式の方を「好ましい」と答えた。図3はこれら2種の表現に対する彼らの反応をグループ別に表したものである。彼らは音楽を聴きながらそれぞれの様式に該当する言葉をチェックしていった。

図3 日本様式と西洋化様式の民謡歌唱に該当する言葉



グループ1では西洋化された歌唱を「日本民謡らしい」と感じた者は一人もいなかった。彼らにとって“そのものらしさ”が好みの重要な要因であることがわかる。一方、グループ2では“そのものらしさ”より“軽い”“美しい”がより強く影響している。グループ2の中には西洋化された歌唱を“存在感”と感じ、日本様式を“古い”とした者がいる。補足的な質問に対する回答結果から過去の日本音楽体験に対してグループ1の方がグループ2よりも有意により高く評価していた。同時に行われた聞き取りテストの結果では、ジャンルの特定問題について両グループの間に有意差は見られなかった。ちなみにかけ声は非常に印象的なので、被験者の中には質問紙の自由回答欄にかけ声について記した者もあった。

3. おわりに

約半数の高校生が合唱による西洋化された民謡の方を聴取することを好んだ。このことは彼らの音楽的感受性が西洋化の方向に向かっていることを示している。にもかかわらず、このグループの中にも日本様式の民謡を“明るい”“軽い”“生活感がある”“現実感がある”

“新鮮”“美しい”と感じた者がいた。全体では81.7%の者が日本様式を“民謡らしい”と感じている。彼らの合唱表現を拡大し、彼ら自身の音楽的アイデンティティを育成するために伝統的な音楽表現が合唱の中にもっと積極的に取り入れられてよいのではなかろうか。

作曲家、柴田南雄（1916-1996）は伝統的なわらべうたや民謡に基づいてそれらを西洋化することなく大きなシアター・ピースとして仕上げている。彼の北越戯譜（1975）や浪速歳時記（1983）では児童合唱が取り入れられ、そこでは音楽的感受性に関する5つの日本の特徴（吉川英史 1979 189）……単音愛好性、余韻愛好性、騒音愛好性、声楽指向性、音色重点主義が現実的な響きとなって作品に結実している。

柴田南雄のような視点からの合唱曲が日本の子どもたちのためにもっと多く作曲されることが望まれる。このような作品が日本の子どもたちの自分自身の音楽性を育成し、世界の音楽文化を豊かにすると考えられる。

*本稿はInternational Choral Bulletin 1996-3に掲載されたCHORAL EDUCATION IN JAPAN UNDER THE IMPACT OF WESTERN MUSICと題する論文を日本語訳し、若干の修正を加えたものである。

引用文献

- 余暇開発センター 1989 余暇利用7ヶ国比較'89
Emile Guimet 1880 Promenades Japonaises Tokio-Nikko Paris 1880 青木啓輔訳
雄松堂出版 1983
平野健次 1983 “間”音楽大事典 V-2394 1., 平凡社
吉川英史 1979 日本音楽の性格, 音楽の友社
町田嘉章 1983 日本民謡集, 岩波書店
奥 忍 1990 異文化としての日本音楽, 音楽科における日本音楽のありかた, 奈良教育
大学
奥 忍 1996a 教員養成における日本音楽教授のための基礎的研究, 1994-5文部省科
学研究経費報告書
奥 忍 1996b シンポジウム「音楽と生涯学習」, 日本音楽教育学会近畿地区平成7年
度第2回例会報告, 音楽教育学vol.26-1, 日本音楽教育学会
塩野 勇記 1989 改訂中学校指導要領(音楽) 明治図書
Smith, James J. 1980 “Chorus” in New Grove Dictionary of Music & Musicians,
Macmillan Pub. Ltd.

[MUSIC RESOURCES]

- 斎太郎節A, D 1990 鑑賞教材中学校2年生, 教育芸術社, CG-1180